

自由論題 5

報告テーマ

若者と中国の政治秩序(1962-1966)
“Youth and Political Order in China(1962-1966)”

氏名(所属)

黄 哲(東京大学院)
ZHE Huang (University of Tokyo)

要旨(800字程度)

文化大革命において、いわゆる「紅五類」出身の若者と、知識人、中農などの一般的な家庭出身の若者と、「黒五類」出身の若者という三者の間では異なる政治参加の選好がみられるという先行研究がある。そこには、ある種のカーストに近いものが見て取れる。それについて、今までしばしば階級として理解され、階級路線という枠組みで論じられてきたが、マルクス主義で唱えられる階級とは異質なものであるという説も見られる。しかし、後者については新しい解釈の枠組みが提起されていないとして課題がある。

そこで、本研究ではまず、階級という概念で毛沢東時代の秩序を説明する上での限界について説明した。その代わり、1960年代前半の中国社会における政治秩序の本質とは何かという問題について、スペンスのシグナリング理論をベースに検討した。つまり、革命後継者の養成のため、信頼できる者を特定したい国家は、信頼性という私的情報が知りきれないという情報不対称に直面した。それを解決するため、観察できる出身階級、階級区分、政治的態度などの情報に基づいて若者を判断した。これらの組み合わせによって当時の中国社会の秩序を形作られ、政権からの距離が測られていた。若者もそれに応じて私的情報を伝えようとシグナリングすることがあった。

さらに、1962年から1966年まで若者に対する政策の変遷をたどり、民兵の政治的条件の例を挙げ、判断材料には出身階級と階級区分の矛盾、出身階級と政治的態度の矛盾があることを指摘した。前者について、実践上階級区分が出身階級に取って代わられることがしばしばあるため、出身階級と階級区分は本質主義的なものではなく、人為的に構築されてきた境界線が曖昧な二つの概念であると論じた。そのため、政治的態度と出身階級の矛盾は若者の行動を解釈する上で重要であると考えられる。

最後に、1962年以降出身階級より政治的態度に天秤が傾き、情報を引き出すために大衆が動員され、「四類分子」の子女のような出身階級の良くない若者は自分の信頼性を政治的態度で積極的にシグナリングするようになったことから、様々な活発な政治参加が生まれたと論じた。